

## 西アフリカの昔話

異類婚姻譚を切り口として

江口一久



漢字がたくさん入った題名で異類婚姻譚を切り口としてということありますけれども、異類婚姻譚というのは人間が動物とか、物とか、精霊とか、人間以外の人と結婚するという話であります。人はどうして結婚するのかという話を異類婚姻譚を中心に皆さんと一緒に考えていただきたいと思います。

西アフリカというのをご存知ですか？あまり知られていないのがつらいのですが、西アフリカは時差が日本と八時間から十時間位ある所で、こちらが夜の時、もうはまだ夜になっていない、朝だといううございます。西

アフリカというのは、アフリカの西の方です。西アフリカと北アフリカの間には、サハラ砂漠というのがあります。非常に重要なのですが、今日のお話には入れないでおこうと思います。西アフリカにある国の名前を上げてみたら、セネガルとかガーナ、ナイジエリア、カメルーン、ガンビア、トーゴ、ニジェールなどがあります。ご存知ない方は結構ですが、お帰りになつたら帝国書院の地図帳でもご覧になつたら分かるかと思います。ずいぶんたくさんある国のある所です。国がたくさんあるだけではなく、たくさんのことばがある所です。いろいろなこ

とばがあるということは、おたがいが理解する事ができないことばがたくさんあるということです。たとえば日本語と朝鮮語といった場合、おだがいいくら一生懸命しゃべっても通じないでしょう？おたがいが通じないことばが計算の方法にもよりますが、約千ほどあります。

言語の数を数えるだけでも大変な学問になりますし、まして一つずつ習っていたらえらいことです。西アフリカは、ことばの面からは、おそろしい所だということです。

言語というのは、ちょっとずつ變っていくものが多く、ここからここまで分かるけど、ここからここまで分かからず、ここからここまで分かると、こここの人は分かるけど、こここの人は分からずと、ちょっとずつ変わつていくものが多いのです。西アフリカでは、一つの場所に三つも四つも五つも、場合によつては五十位のことばをしゃべる人が住んでいます。そういう状況を頭に入れて今日の話を聞いていただきたいのです。それから、ここからこれがAでここから先がBというのではなく、AやらBやらがゴチャゴチャと住んでいる。西アフリカの人たちの多くは一人で二つ、三つ位しゃべる事が日常受けると言えるでしょう。

それから西アフリカの話で注目しなければならない事は、あちらはどんな事も文字を介さなくて、口で言う社会です。これは、「口頭社会」ともいるべきものです。ですから昔話が○○書店から売り出されているというわけではなくて、毎日語られており、非常にたくさんの昔話があるということです。ですから、たとえば「どうですか、あなたは昔話知っていますか？」とたずねる。「知っている」という返事があり、その人に「ちょっと話してくれ」と言つて話をしてもらつたら、五十も六十も話が出来ます。日本はどうですかね。「桃太郎」「浦島太郎」と「カチカチ山」と、せいぜい十位話したら「も

アフリカでは、北の方は雨が降らない。南の方では雨がよく降る。ですから北の方は乾燥しています。北の方は一年間の十ヶ月、雨が降らない。南の方は毎日雨が降つている。そう思つていただければいいです。もつと北に行くと雨が降るのは一年間のうち一週間とか、三日間とか、一日しか降らないとかそういう場所もあります。ですから環境は様々で、環境によつて昔話はかなり影響を受けると言えるでしょう。

それから西アフリカの話で注目しなければならない事は、あちらはどんな事も文字を介さなくて、口で言う社会です。これは、「口頭社会」ともいべきものです。ですから昔話が○○書店から売り出されているというわれども、作者は山川惣治です。あの舞台になつている所がサバンナです。サバンナというのは草が多い所です。そこに象がいたり、キリンがいたり、そこにウサギがいてハイエナが出てくる。こういう景観をしている世界があの少年ケニヤの世界ですが、昔話もサバンナで語られる昔話には、登場する動物もサバンナにいる動物が多いのです。

う堪忍してくれ」と言う、そういうお父さん、お母さんがほとんどではないでしょうか。でも、その西アフリカでは一人でも五十、六十も話す人がたくさんいます。一人で一番たくさん語つて今まで残つてているのは、六百話です。日本でも五百話語つたというのは、あります。日本の五百話語りは百名はいかないと思いますが、むこうの方では、かなりそういう人がいます。ですから、たいへん豊かな昔話があるということになります。

昔、「少年ケニヤ」という冒險小説が流行りましたけれども、作者は山川惣治です。あの舞台になつている所がサバンナです。サバンナというのは草が多い所です。そこに象がいたり、キリンがいたり、そこにウサギがいてハイエナが出てくる。こういう景観をしている世界があの少年ケニヤの世界ですが、昔話もサバンナで語られる昔話には、登場する動物もサバンナにいる動物が多いのです。

熱帯ギニアの森の中というのは見通しはきかないし、真っ暗ですし、といふので、その中に出でてくる動物は当然変わつてきます。たとえばアフリカで一番小さな羚羊

茶飯事ですが、日本人は英語がしゃべれるといったら、あの人はえらい秀才だというし、三つ位しゃべつたら天才で、五つ位しゃべる人を形容することばがないほどですが、これは、ちょっとおかしい。子どもの時から聞いたら、全部しゃべるようになるわけですが、おとうさんがAという言語をしゃべつて、おおかさんのがBという言語をしゃべつて、家の外の人はCという言語をしゃべる。そしたら、人は自然に三つしゃべれるようになるわけです。

多言語使用を念頭に置いて、昔話の移動を考えてくれ。Aという言語で語られていても、それが簡単にBという言語に写し変えられて隣に進んでいく。ですから昔話の境界と言語の境界というのは、必ずしも同じではない。昔話はおしゃべりでしょう、どんどん一人で三つ位のことばをしゃべる人がいたら、隣の人におしゃべりをしていく。ことばが違つても、昔話はどんどん移動していく、そんなふうにしていきますから、昔話の取り扱いは、ことばの扱いとは違うということです。

こういうことがあります。みなさんご存知のように西

類はロイヤルアンテロープと言うのですが、背の高さは三〇～四〇セメタ位のシカですが、それが出てくる所といふのは、熱帯雨林の一一番西の端にしか出できません。そこでは他の所に出てこない動物が出てきます。

それからコンゴという所は、ものすごい大きな密林ですね。そこにはいろいろな動物がいるわけですけれども、そこにはサバンナの「少年ケニヤ」の世界とは全く違う世界がありまして、そこに出でてくる動物も違っています。たとえば、カメというのが出てきます。のそのそしたカメが出てくるのです。コンゴの密林地帯ではカメが人気ものなのです。ウサギとカメの話では、かならずカメが勝つという話がありますが、アフリカのウサギとカメの話は熱帯雨林でできた話といえるでしょう。

舞台装置も環境によって変わってくるところがあります。たとえば、服を着てる所、これは服のある所しか服は着てませんし、それから服を着るという話が出てこない所もたくさんあります。最初はわれわれの先祖だつて服が発明される前は、服がなかつたと思えばいいでしょうか、アフリカでも服がない地域というのがあります。

でも仕方がないですから、まあ荒っぽい話をさせていただきたいと思います。

アフリカで「こういう」とが言われるのですが、アフリカの昔話には、アンガジマン(engagement)があります。まあこれは文学で使われるフランス語なのです。それはどういうことだと申しますと、つまりコミットメントと英語で言いますけれども、昔話が社会と深く関わりをもつということです。関わりですね、昔話と社会、日常生活、それから信仰、それからかれらの生き方、そういうものと昔話が深く関わっているという事であります。これはそう言わされているだけであって、そうでないとえばそうかもしれません、わたしも昔話は何か大事なもので、日常の生活とか人々の生活を規制するもので、なかなか関わりがあるので、たとえます。浦島太郎にしても、われわれの感覚では、あれは昔のことで、あれとわたしとは関係ないというふうに考えます。アフリカの昔話は、今だにかれらの生活と関わりをもつてゐるのです。

たとえば、タブーというのがありますて、昔話は夜に

す。どちらかと言えばサバンナ地帯の方が早く服を着て、密林の方が後だと、こうこうことが言えると思います。

昔話のなかでもそういうことが色々と違つのです。

それから、アフリカで北の方は、イスラム教の影響を受けた所が多い。イスラム教徒の人が多い。イスラム教徒ってご存知ですか？ ちょっと前に回々教<sup>ハイハイ</sup>と言つて中学校の教科書に書いてありました。回教です。回を中国語ではhuiと言つ。だからフイフイ教と言つたのですね。

イスラムの世界では、昔話もイスラムの様々な伝統の影響をうけます。王さま、お姫さまが出てきたり、魔法のカーペットが出てきたり、それから精霊(jinn)というものが出てきたりするのです。王さまが出てきて、お姫さまが出てくる。ペルシャのお姫さまとはちょっと感じが違いますけども、そういう話が出てくることになつています。

密林では、海の怪獣とか川の怪獣とかさまざま精霊の世界が展開してきます。

今これからお話しするのは、あまり違ひばかりを言つ

しか語られません。毎に話をしていると「あいつは死ぬ」とか「飯が食えなくなる」とか「貧乏人になる」とかさまざまタブーがあります。だから昔話はかならず晩にします。

そしてやはりかれらは、非常に真剣に語ります。ですから、その線にそつて考えてみたいのです。つまりですね、社会生活を営んでいくには、いろんな智慧が必要です。その智慧が昔話の中にふくまれているというふうに考えます。わたしは西アフリカの方では、そういう智慧というのが入つていて、それが生き方も左右しているのだと、そういうふうに考えるわけです。

桃太郎は桃太郎、勝手にやつていればいい。どんぶりこ、どんぶりこと、流れて行つたら終りです。鬼はやつつけたらしいと。それだけじゃなくて、それはいついたいなにを表しているのだということを、わたしは最近、少し考え出しているのです。その一端を皆さんと共に考えてみたいと、こういうわけです。

昔話というものは、わたしが言つてゐるよう、たつた一つの昔話というのがあるのではなくて、むこうには、

千ほどの言語があり、その言語ごとに異なるグループがあるわけですが、一つ一つのグループの中で昔話の分類の仕方が違っているわけです。分類の仕方が違うというのは、それは歴史物語であるとか、これは昔起こった本当にあつた事とか、われわれの伝説にあたるような事もあるし、こういう事がなぜどうなつたかということだけ説明する分野もあれば、かれら自身の分類の方法があるわけです。

さて、西アフリカの物語というと、西アフリカに行ったら朝から晩まで話を聞いているというわけにはいかないですけれど、晩になればかなづ話をします。西アフリカは、夜になれば真つ暗です。電気もなければ水道もない。残念ながら、電気もない所までビデオが入ってきまして、ソニーだとかパナソニックとか、それは自動車のバッテリーをつないでビデオを見るのです。だから森の真つ暗なところで、突然撃ち合いの音が聞こえたりしてたいへんです。アフリカの昔話を破壊しているのは、日本であるということを言つておきたいのです。

二十数年お付き合いをしていくと色々な話を集めるこ

ら大したものですね。ですからそういう意味ではいいわけですが、ま、五人のお嫁さん持つていたら愛情というのは平等にいかないですから、AとB、C D E F Gとたくさん持つていたら、お嫁さんたちのあいだで愛情分配に不平等が生じてきて、そして、ねたみが起つて争いが起つて、ある時は人殺しにまで発展するのです。それから子どもを巻き込み、おじいちゃん、おばあちゃんを巻き込んで非常に大きな話になつてくるわけですが、その手の話が非常に多いのですけれど、あんまりどこにも発表されていないのです。ヨーロッパの人たちが、おもにアフリカの事を研究してきましたけれども、ゴチャ、ゴチャした嫁さんと、嫉妬や何かはおもしろくないと考えたのか、ほとんど発表されていないのです。

また昔話の世界といつても、昔は探検隊が行くような世界だったので、男がたくさん行つたわけです。それで女人人が行つたら、関心持つて、きっとそんな話をたくさん集めたと思うのです。男たちは鉄砲持つて「おまえ、昔話をわなかつたら一発撃つ」というような態度でないにしても、大変高慢な態度をしてきたのですから、こ

とも多いのですけれど、だいたい昔話のどういうものがどれ位分布しているかと、ちょっと言っておきたいと思います。

昔話のほとんど半分以上は、家庭内でのイザコザの話です。

アフリカでは、一人の男が一人、三人、四人、お金さえあれば十人、二十人もの嫁さんをもらうのです。北カメリーンのある部落では、観光客に二百人ほどいる自分の嫁さんを見せるという首長がおりまして、全部紹介してくれます。一人一人から入場料を取るというそういう商売をしている人いるのです。アフリカではとにかく一夫多妻というのが原則であります。悪い意味じゃないですよ、一夫多妻制というのは。またよい面もあるのですから。今日は結婚生活の話で、それが一夫多妻制のいい面もあります。たとえば、二人お嫁さんがいれば一人が病気になつても、もう一人が子供の面倒を見られると、それはある面ではいいことじゃないですか。それから家の前を掃除するのも、半分Aが掃除してこつちはBが掃除して、五人いたら五分の一で済むんですか

の手の話は非常に少ない。ですから意外と昔話全体のなかでは家庭内の話が多いのです。今日の話も実は家庭内の話の多少延長でもあるのですが。

あと残りの四〇%位まで動物譚、ウサギとカメと言いましたけれど、ゾウとかカバ、ハイエナとライオンとか、それからツルとヘビなどの話が非常に多いわけです。とりわけ動物の話のなかにはトリックスターの話が非常に多いのです。トリックスターというのは悪賢い、人を騙す動物のことです。日本のウサギがワニザメを騙した話は古事記の話ですね。ワニザメを騙してウサギがトントントンと飛んで行くと、もうちょっととというところで、「お前騙したな」といつて捕まつて皮をはがれるというストーリーがありますが、このウサギはトリックスターとして、その手のものが非常に多いのです。

あとの五%か一〇%これはセックスの話が多いです。どうして男と女がセックスを始めたか、とかですね。どうして今の性器が今日の形になつてているかという話があるのです。これもまた、ヨーロッパの宣教師らは汚いと、本当にのせるべきではないとこれもほとんど紹介されてい

ないのです。

あと残りの一〇%位が異類婚姻譚という話になります。

今日はね、じつは結婚の話です。ですから、お嫁さんをもらうとかもらわないとか、その話なのですが、だいたいちょっと次のことを頭に入れておきましょう。どの社会にも、お嫁さんを交換するさまざまなルールがあります。村が二つの部分に分れていて、AとBという所はお互いに交換するということころもあれば、原則的には姉妹はめどらないとかですね、それから近い親戚からはもらわないとか、いとこはもらつていいとか、父方のいとこはもらつていいとか、母方のいとこはもらわないとかさまざまなるルールがあります。結婚するとだいたいは日本なんかと同じよう夫の方へ行つて住みます。それから子どもはお父さんと一緒に住むことが原則になつてゐるところがほとんどです。

それから結婚に関しては、二つの家族が話し合いでお嫁さんにこつちに来てもらう場合には夫方は、お嫁さんとのところに婚資という結納金みたいなものをはらいま

す。実際来てもらうわけだから、向うから労働力も減るし、子どももつくつてもらわなきやいけないということでも、それはそれに対する支払いをするわけです。それがまあ大変な量になります。日本の形式的な結納金だけじゃなくて、牛が十頭とか十五頭とか、あるいは毎年、労働にきてもらうとかの婚資贈与ということがあります。それは非常に大事な事なのです。そして離婚した場合には、それがまた、返つて来るとか各部族によつて風習が違いますけれど、そういう親たちや大人たちの社会が決めたルールがあります。

わたしもある時、まだアフリカを知らなかつたころ、ニジェールで「アフリカの結婚式あるから出てこいや」と言うので、さあ、これからは酒はいっぱい飲めるし、「駆走も出でくるかな思つてどんどん歩いていつたら、真つ暗な野原の中に着きまして、「ここでなにしてんね?」と言つたら「結婚式してんのに分らんのかい」と言つても、黒人が暗い所にいて分からない。それでもよく今考へてみれば、両サイドに分かれてですね、婚資の贈与をいくらするかということで、おたがいおじい

ちゃんにはいくら、おばあちゃんにはいくらと、いろいろと両者が決定をしているのです。で、その間にグリオという芸をやる人がいて「これはなんぼ与える事になりました」という話し合いをみなに知らせる人がいるので、それが終わつたところに花嫁がやつて来て、そしてOKということになるのですが、それから先も詳しく言えば花嫁と夫がいつしょの所に寝る、その時にもまたさまざまの贈与がないと寝られないとか大変なのです。ですから結婚は大変です。

どうですか? 日本でも簡単にできますか? 日本も大変でしよう。どこに行つたつて社会で決められたルールがあつて、大変なややこしいルールにしたがつて儀礼にもとづいて、なされるという点に注目していただきたいと思います。

のちほど異類婚姻についてはしゃべりたいと思いますが、結婚にまつわる話というのは大変多いのです。たとえば、これはカメリーンの話ですが、あんまり早いこと結婚したらいけないという話があるのであります。

ある所に娘がいました。だんだん大きくなつてきました。オッパイもふくらんできました。それでみながこの子を結婚させようと一生懸命になつたけれども、娘は頑として聞き入れなかつた。長いあいだ経つた。そこで両親は、もう相手方から婚資をとりかわし結婚の日取りも決めたけれども、どうも子どもは言うことを聞かないし、子どもはおそらく十二、三歳くらいです。そしたらもう仕方ないから、よしつ、ということである日、新郎の方の妹に、こちらの家に遊びに来て「なんやらちゃんとわたしと一緒に遊びに、泊りに行きましょう」と言う。で、そうですかと言つて出かけて行くわけです。どんどん歩いて行くと鳥が飛んで来て「お嫁入り道具は全部運んで行つたのに」「芬兰のかな」「気が付かないのかな」「あんた今、お嫁に行くんやで」とこういう歌をうたうのです。すると娘はその連れに聞きます。「あれはなんや?」と「あれは、どうということはないから聞かんほうがいい」と言う。鳥は何回も言うわけですが、それを聞かせないようにして相手の家に行く、そして着いてみたら、

よく見たような家財道具が並んでいる。「おかしいな」「いやこんなのは、前から置いてあるんやから心配しないでもいい」と。

それから物語は、細かい事は言わないけれど、長い間、そこにいる間に子供<sup>ガ</sup>がてきて、そしてある日、娘であつた人が若いお母さんになつて、井戸に水汲みに行つて帰つて来ると自分の旦那が子供をあやしながら「バンガーマ・アンダー・トゥートゥー('Bangaama annadaa, tuutu)」とうたつていると、それを聞いてよく考えてみると、わたしは、あの時にいやだと言つたのに結局騙されて結婚したんだ、という事に気がついて野原の中に逃げていつて、そのまま身をかくして死んでしまいました、とさ。

このような話があるわけですが、これなんかも十歳くらい、あるいは六、七歳で親たちが結婚相手を決めて、結納金をもらつて、そして娘はそのために大事に育てて、そして六、七歳になれば相手の所に連れていくつて、まだ性生活とか全々分からぬけれども、しばらくして相手

の家族といる間に、自分の夫となる人とお互<sup>イ</sup>いが成熟してきて子供をつくる。そういう昔の習慣があるんですが、それはおかしいことで、本人が納得して結婚しなければならないということを教えている物語なのです。  
また、こんな物語もあります。日本で自分の娘が結婚すると言つたら結婚式の披露宴で泣くお父さんがいます。また、いすれは自分の娘も結婚すると思つたら「今から泣ける」といつて泣いてるお父さんもいるくらいです。それは深層心理学というむずかしい話になると思うのですが、自分の娘を嫁にやるのがいやで、出口のない小屋の中へいれておくという話があつて、そしてそれがそんな所に入れたおかげで最後は、子供がハイエナに食べられてしまうという話があります。この手の話なんかはたくさんあるわけですが、そういう話は何を意味しているのでしょうか。

ほかに「手なし娘」という有名な話があります。

お兄さんが妹に結婚してくれと言う。妹は「わたしは困る」と「いいや、おまえ以外はかなわん」と、そ

して妹が川に水浴に行つてゐる間に服を全部とつてしまふんです。そして他の妹の友だちがみな川から上つてくると、みな服を着るんですけど、妹のものだけない。その兄さんは、木の上にいて「おまえが結婚してくれないのなら服は返さない」などと言つていじめるのです。しかし頑として妹は言う事をきかないわけです。そのうち、そんなに言う事をきかないのなら「おまえの手を切つてしまふ」と言って、本当に切つてしまふのです。手を切られて自分の友だちと逃げて行くわけです。そして、逃げて行くと、ある国で王さまにもらわれるのです。王さまはちゃんと自分の目で相手を見て嫁をもらうではありません。王さまは、たくさんのお嫁さんをもちたがり、手なし娘とその友人ももらつてしまします。ところが、その王さまのたくさんいる他のお嫁さんたちが「あなたの立派な王さまが手のないお嫁さんをもらうのはおかしい」と、「あんな者は殺してしまわなあかんのや」と。それを聞いて王さまはある晩に「それじゃ、あくる朝、みなここに集まつてみよう」と、「あくる朝、みなここに集まるよ

うに」という命令が出た。その晩に自分と友だちが二人でずつと逃げて行くのです。堀を乗りこえて、どんどん遠いところまで行くと、大きなヘビが出て来て「おまえはわたしが恐くないか」と言えば「恐くない」と言う。「それならわたしの口の中に飛び込め」と言うので、手のない娘が飛び込むのです。で、飛び込むと今度は手が生えてきて、もうピカピカの体になつて、しかもたくさんのご褒美をもらつて帰つてくるわけです。自分の友だちもきれいになつて帰つてくる。で、あくる朝、王さまのところに出て行くと、もうみんなびっくりしてしまつて、王さまは残りの女を全部追い出しまつて、そして、そのキレイな人と、その人の友だちだけ家においた、とさ。

話はそれで終わりです。でも単にこれだけでは、この話はなんの話か分らない。実は、このヘビというものが、ぼくは今の考え方ですけれども、男性性器のシンボルだと思います。つまり、はじめは女性が結婚して大変な目に合うわけですが、そのうちにお互いの属性が分かつて円

満な結婚生活に導かれるという話だと思います。これは、これからまた、いくつかの方法を考えて分析してみたいと思います。

もう一つ、よく似た話で、「ヘビのお嫁さんになつた娘」という話があります。

あるところに、ヘビと結婚した娘がいます。大蛇はひじょうに親切で、毎年たくさんの贈り物を嫁さんのお母さんの所にやるのでした。それを、どんどん何回もくり返しました。くる年もくる年もやりました。そこで娘のお母さんは、「あんたの旦那の顔をぜひ見たい」とこう言うのです。最後に「贈り物をあげるからひとまずお帰りください」と言うのですが「おまえの旦那の顔見るまでぜつたい帰らない」「帰ったほうがいい」とむこさんも言う。「いや帰らん」と言う事で「それじゃええか」というわけで真赤な大蛇がウワーッときて、その嫁さんの家をぐるぐると囲んでとぐろを巻いて、今度はそのお母さんの腰にひざにずうつと顔をもつてきた。それで、お母さんが「こわい」と言つてしまつたのさ、これでおしまい。

これは、五十歳位の婦人が話したものですが、昔話にはそれを語るそれぞれの理由があるんです。全てこういふものには慎重な意味があります。どうですか？ ぼくも家の嫁さんのお母さんの顔はあまり見たくないけれども、まあ、そういうことですかね。それと深く関わつてゐるのです。ですから今、挙げてみたのは、全て結婚ということになりますから、結婚と性とか結婚生活とか、そういう事に関わる話が多いのです。

今日の話題として提供したいのは、異類婚姻譚といふことであります。異類婚姻譚と言いますのは、他の人と他の動物、木とか精霊とかそういうものをお嫁さんにもらうとか、旦那にもらうとか、そういう話です。西アフリカで顯著なのは、このタイプの昔話です。一つは男が異類をめとる話。一つは女が異類をめとる話です。男が異類をめとる話にはだいたい野獣の復讐という話が多いのです。もう一つ、女が異類をめとる話には美男子が好きな女の話が多いのです。おそらく異類婚姻譚は、この二つの話に分かれると思います。それから今日、狩猟な

たとたんに食べられてしまった。

これは上手に話したらすぐおもしろい話なのです。これによると、そういうわけだから、自分の娘がどこかに嫁げば、娘のむこが贈り物をしてくれるわけだから、娘の嫁ぎ先に行つて自分の目で娘の姿をじっくり見ようなどと考えてみてはならない。義理の息子は義理の母の尻の穴を見ていけないし、義理の母も義理の息子の尻の穴を見ようとしてはならない。女は体を洗つていると知らなかつたのだ。娘むこは彼女に自分の本来の姿を見られたので恥ずかしく思つた。もしも大蛇が彼女をそのまま家に帰らせていたら、彼女はあとでこの大蛇のことを見ずかしめるだろう。だから大蛇はこの女を飲み込ん

どが行われていない場所には、その両者が混合したような話が見られます。野獣の復讐というのは、狩人が野の獣をたくさんとりすぎて、このままいつたら獣が絶滅するので、動物たちは狩人をこらしめなければいけないといつて、それじやいい考えはないかといい、雌の動物が「まかしとけ」と。わたしが美人に化けて、狩人の秘密をさぐり、どうして殺したらいいかさがしてくるから。それでどうやろか」と言つたら「結構です」という話が、野獣の復讐の話です。

それから美男子が好きな話というのは、非常に簡単な話で、きれいな娘がいた。いろんな人が結婚してくれとくるわけです。「お願ひいたします」と。「あんたはちょっと腹がへこんでる」とか、「結婚してくれ」言つたら「おまえのすねには傷がある」とか、「あんたに傷痕がある」とか、「きれいなツルツルの肌をして欠点のない男がない」となどと言うのです。話によつては「結婚してください」と言つたら「尻の穴のない人と結婚したい」と言うのがあつて、やつてくる男の尻をめくつてみたら「ある

じゃないの、わたし、尻の穴のない人と結婚したい」と話をことわるのです。

日本でもよくあるのですが、怪物と結婚するとき、むかさんが「飯を食わん嫁はんでよう働いて力持ちで器量はようて顔はきれい、それでいかがな物か?」と言つたら、そういうのがやつてくるわけだね。そしてご飯は食べない、旦那の前では。それでも旦那が出ていつたらガーナと頭からこんな大きな口を開けて家にあつた食い物をザ・ザ・ザ・アーと食べてしまつという話があります。そういう、ちょっとありえない話を持ち出すと、そういうものなのです。

この野獣の復讐の話をしてみましょう。これは、モバ族というところの話です。これは、いろんなものがありまして、似た話がたくさんあるのです。ちょっとずつ違うのです。同じだと言えば同じだし、違うと言えば全部違うのです。書かれたものがないのだから同じ話でも百人話したら百種の話ができます。どれが、どの話と言われたら、えらいことになるのですけど、これはモバ族のところでとつてきた話です。そう覚えといてください。

ある村に一人の狩人が居て、その狩人がお母さんといっしょに住んでいて、毎日、狩をしてきてたくさん動物をとつてきて、それをご近所の方も分けて食べるという生活をしておりました。ある日、男友だちと「今日は狩に行こうか」と出かけて行つたのだそうです。そして出かけて行くと「今日は野牛をとりに行こう」と森の中へ出かけて行きました。それでよくそのうしろの方に小さい子牛がいました。それでよく見ていると母牛がどこかへ行きました。子牛だけが残りました。だからそれをねらつたところ、このごろの話には鉄砲もたくさん出でますが、昔は弓であったり、槍であつたりしたのでしよう。バッタリと子牛が倒れました。それで肉をとつて持つて帰ろうとしましたが重たすぎるから、半分しかもつて帰れなかつた。でも、頭と体を持つて友だちと二人で家に帰つてきました。そして皆で食べました。

ところが、野牛は帰つて来ると、自分の子どもの肉のかけらがあるだけで姿は見あたらない、さあ困つた、

ということで、どこで捕えられたんだと搜したところ、その狩人の家の入口に自分の子どもの頭蓋骨だけがぶらさげてあつた。「ああ、こいつに殺られたんだ、よし復讐してやれ」ということになりました。

その母牛はある時、きれいな女の姿になつてその男のところにやつてきました。男は見たとたん「わたしのお嫁さんになつてください」と言いました。どこでもアフリカでも助平なのですよ。実はそれが生命力の大重要なことなのですから、きれいな人を見たら感激するし、それがなくなつたら人間だめなのですよ。この人も「わたしのお嫁さんになつてくれ」と言つたら、思つた通りですということで「なりましょ」とお嫁さんになるわけ。それでも「ウッシッシ」ということで生活していたわけですが、だんだん家の様子が分かつてくると、この狩人というのはだいたいすごく超能力を持つ者と考えられておりますが、そりやいろんな事知つていなければ狩人になれないですね。それで「おまえはどのようにして狩をする?」と言つたら「わしは、いろんな魔法を知つてから狩ができるんや」

と。それで「それじゃ野獣がおそつてきたらどうする?」と聞くと「わたしはおそつて来た時は草に変身するんや」と「草が相手に倒されかけたらどうする?」「木に変身するんや」「木が相手の動物に倒されかけたらどうする?」「今度は「小屋に変身するんや」と「小屋がやられかけたらどうする?」今度は「砂に変身するんや」「砂がやられかけたら?」と言うたら「わたしはクパル(kpal)に……」というのですね。そこでお母さんが息子に「おまえ、そんな事言つたらいかんやないか、口をつつしまないかんやないかい」と。「クパル」で止めたのは、お母さんは息子の身に危険がせまるのがこわいので注意したのです。そこで、息子はだまる事になつたのですが、お母さんは、それまでに家の中のモロコシつまりコーリヤンを粉にして水で溶いてそれを家に置いてあつたお皿にもつて置く。そうするとそれにひびが入つてきた。「あつ分かつた、あの女はあれは人間やない」とお母さんが発見するのです。お母さんは、もうやきもきしながら息子と嫁の会話をきいているのです。それでころあいをみはからつ

て見てて「クパル (kpal)」で息子に話を止めさせるのです。

それである日、娘は「自分の父親に紹介したいから一緒にわたしの親元までついて来てくれ」と狩人に言っていた。狩人は鉄砲を持って、槍を持って、ナイフ持つて準備をしていた。「そんなの止めてくれカッコ悪い」と、「わたしの親元にそんなの持ってきてもらったら困る」とそれを全部止めさせたのです。

他の話では犬をつないであつたら犬を「わたしは犬の肉は好きや」と、夫に犬を殺させ、食べる事もありますが、このモバ族のところでは、武器は困ると手ブラで行かせるのです。

そして、どんどん行く。野原の真ん中まで行つたら「ちょっと待つてくれ」と「今、すぐもどるから」と言い、木の後に行つて今度は野牛の姿になつて走つて来る。そこで彼は草に変身するのです。それでも野牛は草に変身したこと知つてから草を倒そうとする。今度は木に変身し「また木に変身したな」やつつけようとする。すると今度は小屋に変身するわけ「小屋も

親は「おまえがどんな美しい娘を見つけてもその娘が人間か獸か分らないうちは秘密をうちあけてはならない」と言つた。そういうわけで母親が言うことを子供は聞かなければならぬということさ。おしまい。

これは、十七歳の若い青年の話であります。こゝでは要するに美女の化けものと母親が父親が結婚するなど言ふのです。年寄りが見破るので。相手の素性を見破つて「いや、そんなことない。そんなことないって」と。先程のあの話は、娘が粉をませたものにひびが入つたら、また水を混ぜてひびを隠すという話もあるのですよ。それから必ず最後に秘密を言いかけたら、お母さんが止めるので。後は糞とかカニに化けて助けられるとか、自分のところの大が助けにくるとか、これはサバンナ地帯に多いタイプの話です。そういう事をして無事に助けてもらう。

もう一つ美男子が好きな娘の話というのがあります。そういう方もここにおられるかどうか知りませんけれど、いくらそこの男性があらわれても、わたしはも

やつつけよう」と言うんで「ドーッ」と突進してきたら「これはいかん」と言うんで今度は砂に変身する。砂に化けたんだと突進してくるときに今度は針に変身するのです。実は針というのはクパル・ピエヌ (kpal pienu) と言うのですけれども、クパル (kpal)だけのところで止めたのです。その母牛は考えて「クパル」は何やろ、「クパル」は何やろ」と言つている間に針に変身して、牛のしつぽにパッとくつついでそして牛が糞をしたその糞の中にボトッと入つてしまつて、身を隠す。その牛はあちこち巡つたけれども「クパル」というのは考えられないから、あきらめてむこうに行つてしまつたと。そして難を逃れることができました。そして家に息子が帰つてきました「息子よ、いつたいどうしたのだ?」お母さんがたずねると息子は「母さん、こんなことが起つたのだ。もし母さんが『クパル』と言いかけたのを止めてもらわなかつたら、今ごろあいつに殺されてしまつていたさ。あれは、野牛で人ではなかつたのさ」と言つた。

こゝからはコメントなんですけれども、さきほど母

う少しましなもの、もうちょっとカッコいい若いのを、資産のあるせめて家持ちとか、地位もある、もうちょっと待つてみよう。まだわたしも若いと思つておられる方があるかもしれません。そんな人は、西アフリカにもいるのです。この娘のところに、いろいろなものがやつてくる。川の砂が化けたり、ヤシが化けたり竹とか精霊とかヘビとか死体が化けてやつてくるのです。それが完璧な身体をしてやつてくるのです。完璧の理想というのは様々な社会によつて変わつてきますけど、きれいというのは体とかスラッシュとしている。そういう姿になつてやつて来ます。で、それを見て娘は一目ぼれをして親の言つこともきかず飛び出していく。そして野原に行くと本性を表わすわけですから、服を着てる者は服一枚ずつ脱いでいく。そして最後、裸になつてぱつと変身して元のままになつて、アタックしてくるのです。しかし犬とか弟とか妹とかそういう人達によつて助けられる、とそんなふうになつてゐるのです。北カメリーン・フルベ族の話をし

ある所に娘がいました。たくさんの男性が言い寄つて来ましたが「わたしは傷がない男でないと困る」と言つのです。フルベ族は刃で身体に傷をつけたりするのです。そういうものがいない人でないと困ると娘が言います。「そうか」と。

そうすると野原に居るハイエナが人間に化けてきれいな男性になつてやつてくる。そして一目ぼれをして「わたしは、この人と結婚をする。お母さん最愛の人がきたんや」と。「おまえ、注意しろ、完璧な人はないんや」「そんなことはない、完璧な人が来たんや、見てみい」と言つて結婚するわけです。結婚すると言つても結婚するといふとばは、おかしいのだけれど親の言うのもさかずに結婚しても結婚じやないのです。同棲しただけ。一緒になつただけの話で、実はなんの手続きもなく自由恋愛をして、一緒になつただけの話です。しばらく一緒に住んでいたけれど変な事が多い。旦那に植物性のものを食べさせようと思つても肉しか食べない、おかしいな、と思うのです。野原へ

旦那の実家へ出かけて行く、どんどん歩いていく。そ

うすると「」は見たことあるか」「見たことある」「」はどうや?」「見たことある」とつい分家から離れた野原の真ん中に来ました。野原で変身することができます。非常に重要な意味があるので、家の中では変身しない、野原で変身する。文明から遠ざかった野原というのはひじょうに重要な場所です。そこで「ちょっと待つて」と言つても「」に行つたら変身してやつてくる。「ほう」と思つたら、もうハイエナになつてドーッと走つてくる。

そこで娘は大事な事があつたらこれを抜きなさいといふことで、お父さんからもつた頭をといだりする時につかう太い針をパツとなげると地面に突き刺さつて、これがパツと大きなヤシの木になるわけ。そのヤシの上の方に彼女は登るわけ。そしてその一番上の方に行つて自分の家の方にむかつて飼つている犬を……実はいつもお母さんが注意しなければいけないとつて、鎖につないでいる犬を娘が外に行くときは、草のひもでつなぐんです。

その犬の名前を呼ぶのです。この犬の名前がまたお

もしろい。どんな名前かといふとたとえば、一びき田はホビロ・ホビロ (Hobilo hobilo)、二びき田がホビ・サガーロ (Hobi sangalo)、三びき田がサン・サガーロ (Sang sangalo)、四びき田がウイリタ・ジユータ (Wilita juuta)、五びき田がバッジョマーラ・チャカラタテ (Bajjo maayi caka ladde) と言うわけ。犬は「ああ、御主人様が呼んでる」「ウソばっかり言うな」ガーッと犬同士がケンカしたりするような描写もある。「そんな聞こえる訳あらへんやんか、ワン」。

そしてそこにハイエナが木の下に入つてきて「おまえ、血一滴も残さんよにして皆食つてしまふさかい」と言つてそこを掘る。すると娘が「ホビロ・ホビロ」と呼ぶ。すると犬は「イヤー、そんな事はない」「イヤ、あれはそうだ」ということで犬のやりとりが実におもしろい。だんだんとヤシの木が倒れかかっていきます。もうちょっとで危いところで、もう一本針を出して投げるとパアーとヤシの木が出る。そつちのほうに飛び移つた瞬間にこちらの木が倒れてしまいま

す。

そこでまた、犬を呼びます。そうすると今度は犬がやつてくるわけです。そしてハイエナをバババと食べて、そして娘は降りてきて一番大きな犬の背中にのつて家まで帰つてきました。

これは、ひとつヴァージョンです。それから今書いている本にあるモバ族のあいだにも、この手の話があります。部族が違つていたら話の構成の仕方が違つてきました。部族が違つていたら話の構成の仕方が違つてきました。死人はキバシウシツツキの色を借りました。

死人はまた、大蛇の光沢も借りました。死人はハタオリドリの首についている首飾りを借りました。死人は大変美しい男になると、娘のところにやつてきました

た。娘は例によつて「うれしい」というわけで一緒になり、自分の小屋に入れる。

ところが、お母さんは粉をねつて置いておくとそれ

にひびが入つたので、あれは人間ではないということが分かるのです。でも、そんなことを娘は聞いてくれなくて「いつしょにこの人の実家へお嫁にいく」と、お嫁入り道具を持つてでかけて行く事になりました。

足の不自由な妹がヒョウタンの中にカポックの実を入れておきました。そしてどんどん一人が出かけて行きました。

ました。どんどん野原の真中まで出かけて行きました。そしたらそこにハタオリドリがいました。そのハタオ

リドリが「私の首飾りを返してくれ」と言いました。男は首飾りを返しました。それからどんどん歩いて行

くと、白い樹液の出てくる木がありました。その木は「わしにその娘をくれ」と言いました。男は「わしはおまえのためにこの娘を連れてきたのではない」と言いました。

「それじゃおまえに借した背たけを返してくれ」と言いました。返すと男は背の低い男になりました。一人はまた歩いて行きました。今度はキバシウ

シツツキのところにやつてきました。「キバシ」といふのは口ばしが黄色くて牛をつづいている鳥がいるんです。キバシウシツツキが「ぼくの借した色を返してくれ」と言う。と男は色を返しました。男の体の色が変わりました。今度はどんどん歩いていくと大蛇のところにやつてきました。大蛇のところにやつてくると「おまえに借した光沢を返してくれ」と言いました。

そして光沢を返しました。

どんどん歩いていくと墓場がありました。墓場の中には男は入っていました。娘が「わたしは入らない」と言うと無理矢理に嫁入り道具を墓場の中に持つて行きました。娘は仕方なく墓場の中に入つて行きました。

墓の中にはたくさん死人が出てきてあいさつしました。死人たちは歌をうたいました。「美男子を選んだ」「おまえは美男子を選んだ」「おまえは生きている人をこばんだ」「おまえは死者のところへ嫁にきた」「おまえは美男子を選んだ」。彼らは、同じことを何回もくりかえすのです。恐ろしいことが増すのです。

そんな事があつて、その墓場の中ではしばらく生活を

しておりましたら、食べ物も出てくるけれど、食べる気がしない。ふと自分の持つてきた嫁入り道具のなかを見てみるとカポックの実が入つています。カポックというのをご存知ですか？ パンヤの木です。その種をパッと地面になげると大きな木になります。ワアとよろこんでその大きな木のぼって行きました。

そして木にのぼつて「カポックの木よ飛んで行け」「お母さんの家まで飛んで行け」と言うと、そこへ死人がやつてきて「飛んだらいかん、飛んだらいかん。木はそこに止まつとれ」と言うと木は飛んで、実家までとんで行くのです。それを足のわるい妹が見ている。木が実家におりる。妹が「お母さん、お姉ちゃんが帰ってきた」という。「いやあ、あの子は帰つてくるわけがない、もう死んでしまつている」「いやあ帰つてきた、見てみい」と言つたら、大きな木があるから、「木よ木よ低くなれ」とお母さんが言つた。木は、スーっと低くなつてお姉ちゃんは、帰つてきました。そういう事で娘は無事帰つてくるわけですよ。ここでそのコメント

トがあるんです。コメントは後から言つた話と同じなのですが、解釈と関わりがありますから、ちょっとこれらのコメントを紹介しておきましょう。そういうわけだから、妹や弟が盲目だったり、啞であつても、お前はその弟や妹がわたしの弟や妹じゃないと言つてはいけないのさ。この物語は妹が姉を救つたわけだ。おまえは娘で父がだれかと一緒にになれと言つたら、選り好みせずにまずはその人と一緒になるべきだ。もしその相手がいやなら後にでも逃げ出せばよいのさ。選り好みしたりでもすると、この物語のように人でないものがやつて来るということになるかもしれない。ひとつとすると、その相手は木であるかもしれない。娘といふのは勝手なことをしても結局、良い相手にはあえないだろう。そのうちにみなお前の事を嫌つてしまふだろう。

そういう話がたくさんあるのです。こんな話をどう考えるかという事であります。もう頭の良いみなさんは、そんなの非常に簡単だとこう言つておられるだらうと思

いますが、まず最初に美男子がすきな女の話というのは、やはり現実を見つめるという話がありました。それから両親がちゃんと決めたところに行きなさいということです。一番最初に昔話はすべてその社会のいろんな事を教えていると言いましたが、社会生活と密接につながりがあるということです。自由気ままに恋愛をするよりも、結婚は、やはり結納金を納めたとか社会のさまざまなるルールを守つてしなさい。そういう話にも考えられるし、それから傷がついていない人なんかいないということであります。やっぱり人には、何か欠点があるのだという事です。もっと他の話のなかには「帰ってきてまた、普通の男と結婚しましたよ。そして子供をつくって幸せに生活しましたよ」とあります。

もっと深いレベルでものを考えてみたいと思いますが、アフリカ人は人間が自然であるということを一番嫌がるのです。それはみなさんも嫌でしょう。たとえばわたしたちは髪の毛を切るということは自然でないのです。自然に逆らっているのです。自然とは髪の毛ボウボウのことです。それでこう切つてるわけですよ。それか通の男と結婚しましたよ。そして子供をつくって幸せに生活しましたよ」とあります。

もう少し深いレベルでものを考えてみたいと思いますが、アフリカ人は人間が自然であるということを一番嫌がるのです。それはみなさんも嫌でしょう。たとえばわたしたちは髪の毛を切るということは自然でないのです。自然に逆らっているのです。自然とは髪の毛ボウボウのことです。それでこう切つてるわけですよ。それか

ら自分が話をする時の目上の人によつてはちょっと遠慮して話しているでしょう。それは自然ではないからです。自然なら言いたい放題、やりたい放題です。それはわれわれは、自然をコントロールしているのです。それは文化があるからです。

それからモバ族のところでツルツルのキレイな人が出てきましたよ、というのがありましたけれどモバ族のところでは刀で体中に痕<sup>はげ</sup>というのをつけます。ものすごくたくさんついてる。私は美しいと思うんですが、物語の中の娘は「なぜそんなものをつけるの?」と言ってただをこねる。

あるいは、フルベ族というのは割礼をします。割礼をご存知ですね? ペニスの一部を切りとるのです。

それから女性の性器に傷をつけるものもあります。それをなぜするかということです。それは野性ということつまり、自然のままは醜いという思想なのです。そうですがね髪の毛を切るのと同じ思想ですね。

ですからですね。そんなツルツルで自然のままの格好の人が出てくるのはおかしいというのです。

#### 絶対他の人に言つたらいけないということです。

アフリカの昔話で頭蓋骨が落ちている、そこで「なんやおまえその頭蓋骨?」「おまえ、わしにそんな事、聞かんほうがいい、なんでそんななつたか聞かんほうがえ」と。「いやわしは聞きたい」ということで聞いたたら人と結婚しなさいという話でありましょう。

それからもう一つ、さきほどの女が化けて男と結婚する野牛の話がありました。それはなにを示しているのでしょうか。お母さんが言いましたね。「自分の秘密は絶対明かしたらいけませんよ」ということですね。アフリカ人のたくさんの部族のなかのあいさつに「神さまがあなたの秘密を守つてくださいますように」というあいさつがあります。それは何でしょうか? これは現代社会でもそうですよ。みなさんね、たとえば今「エイズ」というのがあります。これは、たいへん恐れられている、それがあるということが欠点であります。これは、個人の秘密であります。それをもらした途端、あなたはおそらく職を失うこともあるでしょう、嫁さんも失うでしょう。どんな事があるか分からない、だから自分の秘密は

女性が男性のところへお嫁にくる。一人の男が三人、四人の女性をもらうわけです。また、子供はお父さんのものです。しばしば離婚します。で、お嫁さんはまた、他の男のところへ行きます。で、子供を旦那のところにおいておくでしょう。というわけで女人は男の間をぐるぐる回つて行くのです。

妻とか夫とかそういう概念ではとらえられない世界に、アフリカの人たちは住んでいて、妻と夫ということばがないところが多いのです。ただ女と男ということば

があるだけです。それで一人の夫が何人の女を持つていたりするわけです。そうすると、なにが起こるかというと他人の嫁さんを盗んだり、嫁さんが愛人と自分の命をとつたり、さまざまなことが起ります。それで結婚の理想は、男と女が一体になるとかいう話ではないのです。

アフリカの教訓にこういうのがあります。「野原と川と王さまと夜と女とは、信じてはならない」。野原といふのは何が出てくるか分からぬ。川といふのはいつ増水するか分からぬ。それから王さま、王さまには絶対に秘密を言つたら何が起こるか分らない。それから女、女だけは信用してはならない。そしてそれを信用したがために、命を落したという話がたくさんある。これはまあ、男性中心の社会であります。とにかく自分の身の安全のために秘密といふのは守らなくてはならない。

それが一番近いと皆さんが考えておられるような自分の嫁さんというよくな人にでも秘密を明かしてはならない。昔話のなかでも、そういうものも教えているのではなかかと思います。

時間がなりましたから、日本との比較というのをしておきたいと思いますが、日本の食うか食われるかという話ではないんです。何でも淡白なのです。カメを助けたやつたとか、ツルを助けてやつたら、きれいな嫁さんになつてやつきました。その男は一銭もお金のない貧しい人でしたから、お嫁さんをもう結納のお金もありませんでした。その日の食べ物にも困つていきました。だから、わたしがきてお助け申し上げましょと、いらぬことやらなくてもいいのに機を織つてね。それでその体の毛を一本ずつ抜いていくと……こういう美しい話です。

ところがそれにも関わらず、旦那さんが見たらいけないというのに見てしまつて、残念ながら本性見られて雲のかなたへ飛んでいく。それでおしまい。

話のなかでは、それ以外何も語らないというそういう淡白な話です。

アフリカの話と日本の話で同じ話がたくさんあるのです。それはなぜか？ というと人間が始まつてから、今まで語りをずっとやつてきたのです。だからどれだけ距

離が離れていても、そこまで話は到着するだらうし、むこうへもこつちから行つただらうし、そんなこと少しもおかしいことはないのです。一日一ミリ歩いて行つても、千年位たつたら、結構、進むんではないですか、そうでしょう。だから、その話が一日一ミリ歩いて行つても、アフリカに行つて、また帰つて来たつて別におかしい事はない。長い間の歴史、風土の中で育てられたということによつて、いろんな変化が生じてきます。わたしは原形

のです。日本では仇を返すために来るのはほとんどなくて、恩返しにくるのが多い。そういうのが日本の特色であるということが分かるのです。なぜこれが日本の昔話の特徴であるかというのは、比較のおかげなのです。

西アフリカのものを見るとか、東アジアのものを見るとか、外の昔話なんかも比較しないと、日本の日本人の精神構造というのもよく分からんということになるのではないかと思います。

〔本稿は一九九一年五月二十七日、当研究所主催で開催された連続公開講演会「アフリカの民族と文化」での講演を収録したものである〕

（えぐち かずひさ・国立民族学博物館助教授）

想の影響を受けて、今日、このような話になつたと思う十分あると、そしてツルが飛んできたらエサをやるといふことはないにしろ、ツルをとつて食べなくてはいけない、そういうことにはならないような状況になつてきた。しかも仏教の伝来とかですね。なにか良い事してくれた人には、報いなくてはならないとか、そういう考えが入つてきたり、いつ死んでも何かに生まれ変わつて生命が永遠に続していくと考えるので。さまざまな思想の影響を受けて、今日、このような話になつたと思う